

図書館通信

102

1993. 1

ワインが飲める図書館を

荒 川 紘

私は図書館嫌いの学生であった。顔も名も知らない人間と席を並べる息苦しさや薄暗い書庫の威圧感にどうしても馴染めなかったのである。そのようなことで、私には、自分の通った大学の図書館の外観は思い出せても、内部がどうなっていたのか、臆気な印象さえ残っていない。

私が読書の場所としたのは、どこよりも喫茶店。ここでは未知らぬ客と相席しても、もちろん薄明りの照明だったのだが、なぜか落ち着けた。当時一杯五十円のコーヒーで三、四時間もネバルのはしばしば。だから、よく通ったいくつかの喫茶店については、テーブルの配置からウエートレスの見目形まで、私の記憶はいまでも鮮明である。

そんな私の図書館にたいする見方が変わったのは、十年あまり勤めた大学を辞めてから、素浪人の身となって内職的な仕事のためにアパートからそう遠くなかった国会図書館（東京都千代田区永田町）を利用せざるをえなくなったときである。多くの図書や雑誌の閲覧に迫られたのである。生活のためとなれば、和書にかんするかぎり見たい書物のほとんどが手にできるこの図書館が急に頼もしい存在になってきた。本の多さの威圧感も安堵感に変わる。そして、私の図書館嫌いが、結局のところ食わず嫌いであったことにも気づく（ということで静岡大学に赴任してからも図書館にはお世話になりっぱなし。このような稿を書く破目になったのもそのためであろうか）。

それだけでない。科学の発達に図書館がいかに大きな役割をはたしたかを、私はその後科学史を学ぶなかで教えられることにもなった。たとえば古代アレクサンドリアの図書館。アレクサンダー大王の幼友で、エジプトにプトレマイオス王朝を開いたプトレマイオス・ソテルが、前四世紀末、研究・教育機関ムセイオンの付属施設として設立した図書館である。世界に存在するすべての書物を収蔵することを目指にしたこの図書館には五十万巻もの書物が収められるようになり、さらに、そこに収めきれない書物のために第二図書館も建設されたという。全宇宙の認識を追求したアリストテレスの教え子であったアレクサンダーが全世界の征服にむかったのにたいして、アレクサンダーの幼友としてアリストテレスの教えをうける機会があったと想像されるプトレマイオス・ソテルは、いわば全ての知の収集に王朝の財力を注ぎこんだ。この知的環境のなかで、ユークリッドの幾何学、アルキメデスの数学と力学、アリストタルコスやプトレマイオス・クラウディオスの天文学、ヘロフィロスやガレノスの医学等々、ヘレニズム科学の花々が繚乱したのである。

ルネサンスの科学はこのヘレニズム科学の再興でありそこから近代科学が勃興しただけでない。近代科学の狙い手となる大学は、図書館を中心とするムセイオンを踏襲する。近代の大学においても、図書館は、大学の活力の源泉、「大学の心臓」と考えられてきたのである。

そしてあらためて静岡大学の改革論議に即して私見をいわせてもらえば、われわれは、なにもましてプトレマイオス・ソテルの精神に学ばねばならない。「大学の心臓」の強化が求められる。図書の購入費を抑え、図書館員を減らすなど、その逆行であり、愚行だ。もちろん、金と人だけがすべてではない。静大の図書館でももっと工夫があつてよいと思う。そこで具体的な提言をひとつ。

現図書館の北側、ふだんほとんど利用されることのない「学園広場」に、本館と廊下で結ばれた第二図書館を設立してほしい。その閲覧室は、いつでもコーヒーが飲め、教師、職員、学生が自由に会話のできる喫茶店風の図書館である。それに、この第二図書館はできるだけ遅くまで開かれているのが望ましいし、ビールやワインが出ればなおよい。ムセイオンの原形は、アリストテレスの学校リュケイオンやプラトンの学校アカデメイアにあるとされているが、よく知られているように、アカデメイアは、水で薄められた（これは大切なことであるかもしれない）ワインを飲みながらの、談論風発の場だったのである。

そんな図書館だったら、かつての私のような図書館嫌いの大多数の学生にも、図書館はずっと身近かな存在となるだろう。学部や学科間の障壁を除くのに役立つだろう。いずれにしても、このような大学の共有の場——教養部もそのひとつである——の充実、それは、新学部や新学科の設立以上に急がれねばならない、と私は考えている。（教養部・科学史）

西鶴・もうひとつのリアリズム

中 村 博 保

井原西鶴は1693年（元禄6）8月10日に没しているから、今年は没後300年に当たる。昨年、300回忌の法要が大阪で営まれ、また、各種の記念行事が各地で盛大に行われた。特に、天理図書館で行われた西鶴本の展示の豪華さは眼を見張らせるものがあった。

西鶴は、ユネスコによって、紫式部、夏目漱石とともに、日本を代表する三人の文学者に選ばれている。この人選、それぞれ考えさせるものを含んでいて味わい深いが、このうち西鶴は、好色物の作者というイメージがよほど強いようで、いまだにかなり誤解されているようだ。またリアリズムの作家として評価されてきたが、こちらの方は判断がかなりむずかしい。今日いう西欧的なリアリズムとは基本的に異なっていたからであり、またそこにわれわれ自身の西鶴に対するスタンスが映し出されるからである。近ごろは、リアリズムに反対する解釈がもっぱらだが、しかし、その人間観察眼まで否定するのは、やはり正しくないように思う。

西鶴が活躍した近世前期には、すでに金銭経済体制が確立されており、またそれを支えた文書のシステムも整えられていて、近代社会につながる要素はすべて現われていた。つまり、近代社会の原形が形成されつつあった時代であり、人間関係が論理化されはじめた時代でもあった。

西鶴の時代は、その特色をひと言でいえば、人と人が、はじめて人間同士としてむかいあった時代であり、互いのリアリティを発見しあった時代であった。そうした人間の姿態のみずみずしい発見の緊張こそ、西鶴の魅力の根元を形成していたように思う。

西鶴はまず、何よりも人の集合である〈世間〉を新しい眼で発見している。〈世間〉は、今日いう〈社会〉とは同じでなく、また中世の時代にはまだ現われていなかった。

西鶴は更に、クールな眼によって、人と人をつなぐものとして、モノやカネや言葉の役割を発見している。西鶴がカネの世界に興味を示し、世界でも珍しい経済小説（日本永代蔵）を書いていたことはよく知られているが、カネはそれ自体として認められていたというよりは、人間を支配し、人間を動かす存在として、むしろ人間に対する観察と相互化されながらとらえられていたように思う。西鶴は「目も鼻もなき小判が物いふ浮世にはなりける」（好色盛衰記）といている。このあたり、モノ自体に対する眼ざしを中心にすえ、そのリアリティを写しとっていた西欧近代のリアリズムとは大いに異なっていた。

西鶴の場合、関心はあくまで人間自体にむけられていたが、その観察の特色は、あくまでトータルなかたちで人間の実体がとらえられていたところにあった。以下三つの例について、そのことを考えてみよう。

ひとつめは『武家義理物語』のなかの、丈山のはなし（約束は雪の朝食）である。京都洛北に隠棲した石川丈山のもとに、幕府に仕えていた頃の旧友、小栗なにがしという浪人が訪ねてくる。歓談のあと、霜月某日、父祖の法要に一飯を馳走したいといい、京の境まで見送って別れる。旧暦11月のある雪の朝、岡山に下っていたはずの小栗がやってくる。内心期待していなかった丈山が、その篤志ぶりに感激し、柚みそだけの朝飯をふるまうと、小栗はまた岡山をさして帰っていったというはなしである。一飯の招待に応えるため、わざわざ岡山から上京したのは、丈山の誠意に感ずるところがあったからだ、それにしても岡山となると常識の尺度に合わない。一見ロゴスからは遠く、非合理、不経済の印象をまぬがれないが、むしろ西鶴は、このアンチロゴスのロゴス、つまりひと言の約束にこだわる武士の情念のうちに、人間を中心から支える大切なものがあることを見定めていた。

また例えば、『好色五人女』のおせん。

物固さで知られた樽屋の女房おせんは、麴屋の法事を手伝ううち、主人が落とした道具が当たって髪を乱す。麴屋の女房に夫との仲を疑われたせんは女房の鼻を明かすためにかえって不倫に走り、事が露見すると、鎗鉋で胸を突いていさぎよく最後をとげる。おせんの行動を伝える西鶴の文章には、心理描写らしいものは一切ない。むしろだからこそ、エロスのもつ不気味な破壊性が、強烈なリアリティをもって現前しているのである。

西鶴晩年の『世間胸算用』の段階になると、登場人物がすべて集団で扱われ、一切姓名をもっては呼ばれず、〈さる貧者〉〈婆〉〈亭主〉などのように普通名詞で扱われている。貧という共通の運命を前にして区別を必要としないとする認識がそうさせたのであって、かえって人間の類的なあり方とそのひろがりリアルに示されている。

西鶴の小説では、人物がすべてある距離感をもってとらえられており、また輪郭だけを描かれているように見える。しかし、だからこそ損なわれることなく存在の核心がとらえられていたわけで、西鶴こそ、まさしくリアリストの名に値する作家であったといえることができる。

小林秀雄は、「竹のことは竹に習へ」といった芭蕉に、日本固有のリアリズムを見ていたが、人間の存在のかたちをリアルに見ていた意味で西鶴は、西欧のリアリズム（つまり近代のリアリズム）とは基本的に異なった、もうひとつの完成されたリアリズム（観察眼）を示現していた作家であったといえることができるだろう。（教育学部・国文学）

第5回日米大学図書館会議に出席して

附属図書館事務部長 鈴木 彬 司

昨平成4年10月6日から9日までの4日間、東京大学山上会館を主会場として第5回日米大学図書館会議が開催された。若干時間は経ったが、大学図書館をめぐる近況を知る上で参考になると思われるので、ここにそのハイライトのいくつかをご紹介します。

今回のメインテーマは、「学術情報への国際的アクセス拡大のための日米協力—21世紀をめざして」であった。会議は基調講演、全体会議、部会及び最終コミュニケの採択等で構成され、日米の大学図書館関係者60余名が参加して活発な討議が行われた。主な討議議題としては、(1)エレクトロニック・キャンパス、(2)図書館における人材養成、(3)資料の保存—その課題と技術開発、(4)図書館サービスと著作権、(5)科学技術情報—その課題と可能性、(6)日本研究及びアメリカ研究図書のコレクション、(7)学術情報の国際流通などである。

まず基調講演に立った猪瀬学術情報センター所長は、有史以来人間生活の中で情報技術が果してきた役割について述べ、今日それがデジタル電子技術の驚異的な発達という形で我々の前に現われ、我々の社会や図書館の変容を余儀なくしている事実を指摘した。そして情報への自由なアクセス、情報の地域間格差の解消、情報の完全性の確保、情報による人間生活の快適さの追求などが重要であることを説いた。

議題の(1)及び(2)は、今回の会議で新たに持ち上げられたものである(ちなみに、(3)～(7)は前回からの継続議題)。(1)については、「高度に電子化された学術情報流通システムをもつキャンパスをどう構築するか」という観点から提唱され、主題に関し日米双方の参加者による現状報告及び意見交換があった。カリフォルニア大学図書館電算化部長のLynch氏は、同大学の9つのキャンパスを結ぶオンライン・ネットワーク・システム—MELVYL—の現状について報告した。MELVYLは、学内に所蔵する700万件を超える図書の目録データベースとMEDLINE, Current Contents, National Newspaper Indexほか各種の抄録・索引データベースを有し、キャンパス内の25万名のユーザーを対象に週平均50万件(繁忙期間中)の検索をこなしているとのことである。MELVYLは現在、全米及び世界の30を超える国々とネットワークを結んでいる巨大な国際ネットワーク—Internet—へのゲートウェイとしての役目も果しており、逆にMELVYL自体がInternetの1つのメニューとなっている。同大学ではさらに、出版物の書誌情報のみならず、資料内容そのものへのオンライン・アクセスを提供する実験に着手し、1992年秋にはコンピュータ分野の数百の雑誌がフルテキストで利用できるほか、材料科学分野の約45種類の雑誌の画像データベースへのアクセス・サービスを予定している。Lynch氏等の報告から筆者は、米国のキャンパス情報システムが新たな発展段階に入っているとの印象を深くした。

議題の(2)「図書館における人材養成」も日米両国の大学図書館の発展のために極めて重要であるとして全体会議で持ち上げられた。とくに近年、情報通信技術が急速に進展し、利用者のニーズも多様化しているため、これに対応して図書館員の技能の向上と地位の改

善が緊要な課題となっていることが強調された。図書館員の養成に関してショッキングな出来事は、近年米国の図書館学校が次々閉鎖されているという事実である。報告によると過去10年間で12のALA（アメリカ図書館協会）認定図書館学校（いずれも大学院レベル）が閉鎖され、これらの中には、最も古い伝統を誇っていたコロンビア大学や最初の図書館学の学位授与機関であったシカゴ大学が含まれていることで、関係者の間では図書館専門職そのものの消滅さえ懸念し不安をつのらせているとのことであった。ALAは目下、特別委員会を設けて原因の究明と対策を検討しているようであるが、今日の革命的ともいえる電子情報技術の発達に図書館員が能力的にも技術的にも充分対応しきれていないのではないかという疑問も呈されている。

会議ではこのほか、テーマ別の部会討議が行われ、「図書館資料の保存の重要性を認識し、修復技術の改善等に関し情報交換を行うべきこと」、「文献複写の増大に関連して、両国間で著作権法の整合性が推奨されるべきこと」、「科学技術情報へのアクセスを容易にし増強するための諸活動を推進すべきこと」、「日本研究及びアメリカ研究に関する図書館資料の収集及び人的交流の分野で相互協力に努めるべきこと」などが提言された。

4日間に亘る会議を終えて、認識を新たにし考えさせられることが多かった。国際化、情報化の波は大学図書館の分野にも確実に押し寄せており、静大図書館にもすでにその対応を迫られている問題もいくつか出てきている。電算機システムの更新、オンライン検索システムの増強、CD-ROM資料の充実など、情報化時代を生きぬくために我々の為すべきことは多い。

最近の資料から①『近・現代フランス文学シリーズ』コレクション

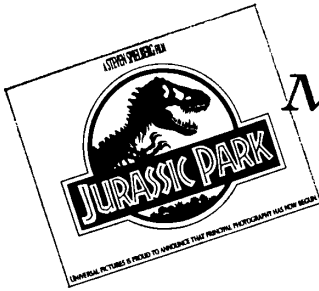
当コレクションは、教養部仏語研究室が1991年度に購入した図書である。全195冊。内訳は、Collection Folio 叢書(Gallimard)に属する図書が100冊と最も多く、次にCollection Poésie 叢書(Gallimard)に属する図書が55冊を数える。コレクションの大半は、この二つの叢書で占められている。これら以外の叢書では、Collection L'Imaginaire (Gallimard)が10冊、Collection Points - Roman (Editions du Seuil), Le Livre de Poche, Double (Editions de Minuit), "10/18" (C.Bourgois), その他、がそれぞれ数冊づつを数える。

Collection Folio 中の図書は、フランス文学の小説が主体であるが、戯曲、エッセイ等の作品も含む。19世紀、20世紀の作家の作品が多いが、19世紀以前のもの、またフランス人以外の作家（作者）の作品も散見される。中世の『狐物語』やギョーム・ド・ロリスの『ばら物語』のような古い時代のものから、ヌーヴォー・ロマンの作家たちやル・クレジオあたりの現代の作品まで網羅している。

Collection L'Imaginaire 等の叢書中の作品は、ほとんどが20世紀フランス作家のもの（主として小説）が占める。

Collection Poésie は、詩の叢書である。19世紀、20世紀のフランス詩人の作品がそのほとんどを占めるが、古い時代の詩人としては、ヴィヨン、モーリス・セーヴ、マレルブ等の作品が散見される。

当コレクションの図書は、いずれも小型版でハンディである。学生にも読み易い。全巻、教養部仏語研究室に備え付けられているが、いつでも閲覧、利用が可能である。

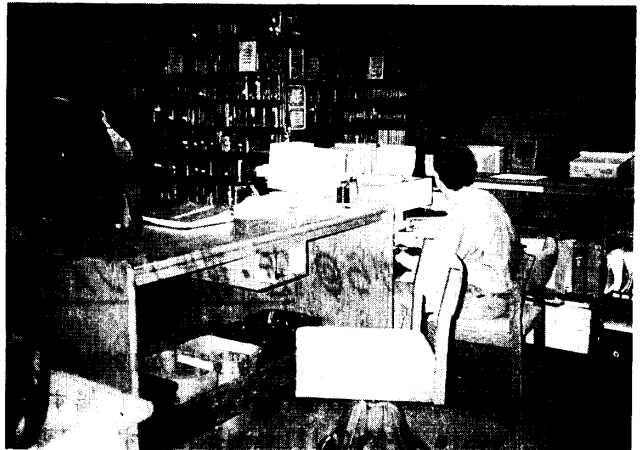


Mayer, Who?

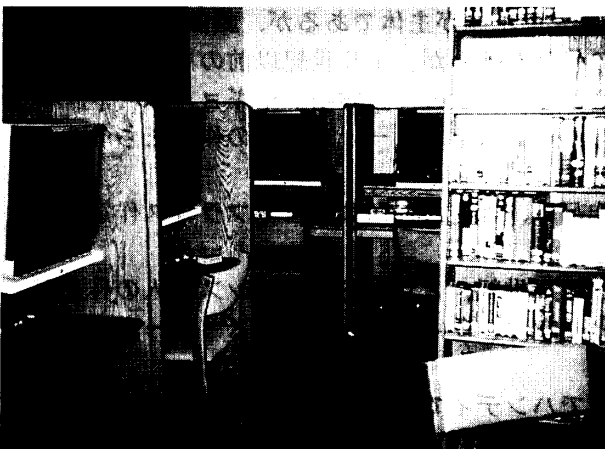
——ハリウッドのふたつの図書館——

ハリウッドに行った。ワーナー・ブラザースや二十世紀フォックスなどのスタジオ訪問では、通常一般には公開されていない場所を見ることができた。「ジュラシック・パーク」のオープン・セットの跡地に立ち、バットマンカーの実物を拝見し、マイケル・J. フォックスの新作の大オーケストラによる音入りを眺めることができたなどの話題（というか、ハッキリ言って自慢話）もあるが、ここでは大学図書館の館報ということで、南カルフォルニア大学の映画学科とアメリカン・フィルム・インスティテュート（AFI）にある図書館のことを述べようと思う。

南カルフォルニア大学ということで思い出すのは、我が図書館が外国に文献複写をオーダーした最初期の相手先のひとつだったこと。約20年ほど前のことで、私費によるものだった。そのころは文献複写業務の環境が整っておらず、国内でも私費の場合は、コピーを手にするまで、ひと月以上の時間がかかっていた。それが、修士論文まるまる一冊のコピーにもかかわらず、三週間ほどで手に入れることができた。彼我の環境の差を感じたものだった。（正に余談だが、記録にとめて置くために、あえて書いた）

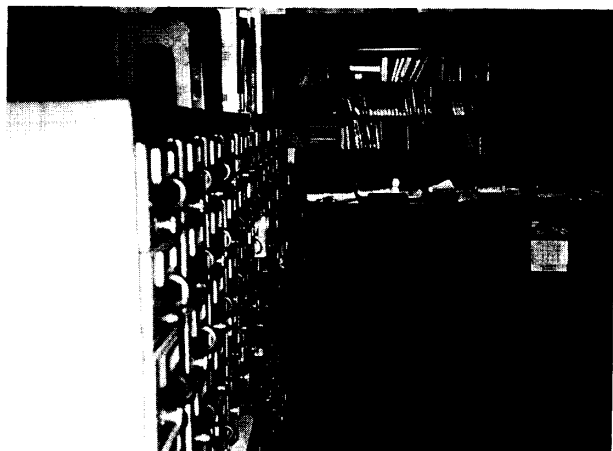


ここで訪問したのは、スチューデント・ライブラリー。ビデオ・テープがズラッと並べられていて、映画学科の図書室であることを改めて認識するとともに、ベータが過半を占めていることに気付く。きわめて早い時期からテープの収集をしていた証拠である。



マッキントッシュによる端末とビデオ・ブースのモニターが、いやがうえでも目立ち、「図書館」というイメージは少ない。

この映画学科の主たるカリキュラムは、理論とか歴史の研究ではなく映画の実作とのこと。それを十分に意識した「図書館」と言ってよいだろう。



アメリカン・フィルム・インスティテュートは、その名前からすると、映画学の研究機関のように思われるし、そうした側面もなきにしもあらずだが、実際のところは学んでいる人の平均年齢三十歳の、博士課程を修了した人が更なる実作の訓練をする場所とのこと。

ソニーが寄贈したソニー・ビルという建物の中では、最新鋭の機器を駆使した映画・ビデオ作りが行われていた。ソニーの本国たる

日本に、こんな施設があるのかしらん、と思いながら見学した。

ここの図書館は、こじんまりとはしているが、スペイン風のごく美しい建物。端末らしきものは無く、昔風の図書館といった趣きだったが、非常に良く整備されたカード目録があり、アメリカ風の辞書体目録の引き易さを実感することができた。

書架の上に掲げられたポスターが映画についての図書館であることを示していたし、そうした単独のテーマに関する図書館だから可能だと思うのだが、図書の並びが出版年順だったことが興味深かった。

この図書館、ルイス・B. メイヤー・ライブラリーという名称である。ソニーが寄贈したのでソニー・ビルと付けられたように、メイヤーがこの図書館のスポンサーだったことに、間違いは無いだろう。また、南カルフォルニア大学のそれも、名前は、ルイス・B. メイヤー・スチューデント・ライブラリーだった。こちらにもルーカスが寄贈したジョージ・ルーカス・ビルディングがあり、スピルバーグが寄贈したスティーブン・スピルバーグ・サウンド・ステージもあるので、メイヤーが寄贈したこと、疑い無いだろう。

間違いは無いだろう、とか疑い無いと書いたのは、メイヤー氏のイメージからすると、にわかには信じられないからだ。ライオンのマークでお馴染みのMGM映画のうしろの方のMに名前を残している人物で、ハリウッドのタイクーンとして

有名である。スタジオの暴君として君臨して、彼によって傷つけられたという、大スター、名監督の証言が、MGMのコピーではないが、それこそ星の数ほどある。

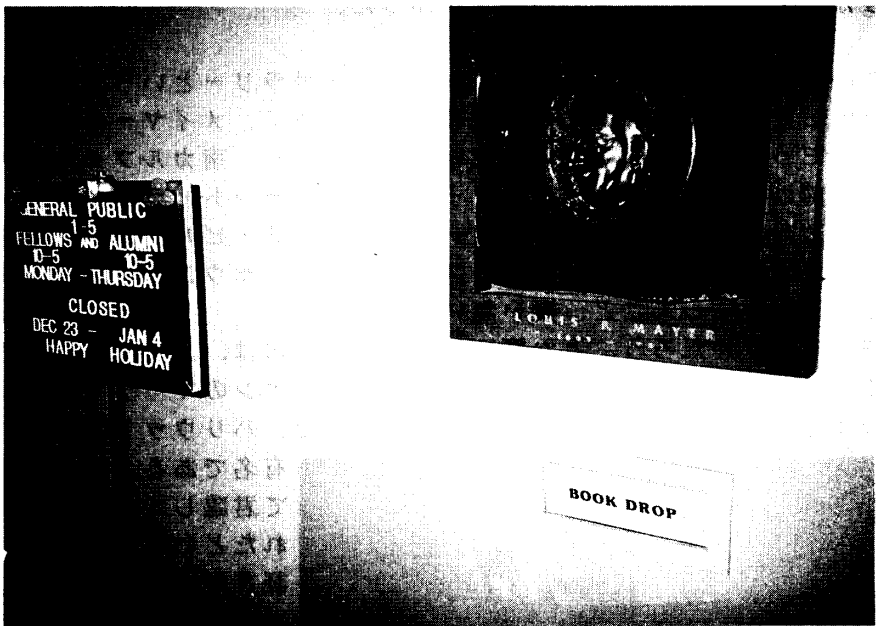
1957年に彼が死んだ時、ハリウッドでも、かつてない数の参列者が集まったが、それは彼の死を悼んでではなく、その死の確認に集った、とウワサされたほど。事の実偽はともかくも、専制と策謀にいろどられた反動のイメージの持



ち主が図書館の寄贈を趣味としていた、とは素直に受け取る訳にはいかなかった。

1930年代から40年代にかけては、映画界のみならず、全米一の高給取りとしても有名だった。その遺産は、一部が遺族に残されたものの、大半は彼の名の元の財団に引き継がれ、慈善事業に使われているとのこと。その財団の意志で図書館が寄贈された、と考えることも可能である。

と書いたところで、改めて彼我の差を感じてしまった。メイヤー氏の意志だろうが、財団の誰かの考えだろうが、それはどうでも良いことなのだ。図書館の職員としては、蔵書を遺贈されるよりは、設備やお金を贈られる方がずっと好ましい。そうしたことについて社会的な慣習があるようだ。それが、うらやましいのだ。



それにしても、さすがメイヤー氏、と思うのは、上の写真は南カルフォルニア大に鎮座するブロンズ像と、下はA F Iで睨みを利かすレリーフ像。死んでからも、その存在を強烈にアピールしているのだ。これからは彼への悪口、ほんの数パーセントだけど割り引いて読んでやろうと思う。(Z)

静岡大学附属図書館報「図書館通信」

発行所 静岡大学附属図書館

印刷所 (株)黒船印刷

第23巻第3号(通巻102号) 1993年 1月28日

静岡市大谷836

TEL 054(237)1111

静岡市登呂二丁目4-25

TEL 054(286)0236